

(課程博士・様式9)

愛知教育大学・静岡大学大学院教育学研究科

学位論文審査報告書

審査委員

審査委員長 野地 恒有
委員 稲葉 みどり
委員 白畑 知彦
委員 倉本 哲男
委員 伊藤 貴浩
委員 _____
委員 _____

審査期間 平成28年5月27日 から 平成28年 7月17日

審査論文

The Effects of Teaching Linguistic Motivation through Image English Grammar

感覚英文法による言語表現の意味づけ指導の効果

専攻 共同教科開発学専攻

氏名 今井 隆夫

生年月日 昭和39年 5月22日

提出日 平成28年 5月16日

本論文は、認知言語学的アプローチによる大学での英語教育の効果的な方法を理論、実践、効果検証という3つの観点から追究したものである。論文は、次の7章で構成されている。

第1章では、論文の概要と教科開発学との関係に言及し、教科専門として認知言語学、教科教育として英語科教育法、教育環境学として学習者の学習スタイルと動機づけが関わりと述べている。第2章では、理論的基盤である認知言語学に関する論考、及び研究者の言語観・コミュニケーション観に関わる理論的枠組みを示している。第3章では、感覚英文法による英語の授業方法と実践報告を行っている。第4章では、感覚英文法による意味づけの明示的指導の効果を検証し、学習者は学習プロセス自体に価値があり、楽しいと感じることを提示している。第5章では、感覚英文法によるアナロジー力の活性化の試みと学習プロセスの観察に取り組んでいる。実験では、反意語というフレーム知識を意識させる学習法の有効性の検証を試みたが、高度な認知能力が必要なため、一定の効果しか得られず、この点は課題としている。第6章では、アナロジー力を活用した事例化とスキーマ化の授業実践と効果の考察をしている。授業では、日本語の事例から始めて、英語の事例へと移行する手順を用い、与えられたヒントによって事例化とスキーマ化の能力を活性化させることにより、ある程度の理解に辿り着くことができるという結果を導いている。この実験においても、事後アンケートから、学習者が事例化とスキーマ化を意識して学習するプロセスを「価値があり、おもしろい」と捉えることを明らかにしている。

第7章では、結論として、感覚英文法による英語教育の効果と英語学習の動機づけ等について、一連の調査、授業実践、検証等を通じて得られた知見を以下のようにまとめている。1) 高校までにある程度英語学習をした中堅レベルの大学生は、英語母語話者の英語感覚を身につけていない現状がある。2) 感覚英文法の明示的指導の効果を検証した。3) 学習者の比喻能力を活性化することにより、既存の知識に関連づけて新たな内容を学ぶことができる。4) 感覚英文法を取り入れた授業を学習者は、「価値があり、学ぶことが楽しい」と感じる。そして、教室現場で感覚英文法を使用する場合の更なる学びやすさと教えやすさを追究することを今後の課題としている。

本論文は、理論、実践、検証、考察等が精緻に記述され、データや資料も添付されており、反証可能なものであり、この分野の実証的研究としては先駆であると考えられる。また、認知言語学をベースとして英語教育学や教育環境学の観点を取り入れた研究であり、教科開発学の論文に値するものである。

以上、諸点から審査した結果、本論文は博士(教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると認める。